田検小学校
ヒストリア　～歴史秘話～
第１５号　　（26.5.13）

アカショウビンという鳥を見たことがありますか。

全長27cmぐらい。身体は鮮やかな赤褐色で，くちばしは目立つ赤色です。腰に青色の斑があり，奄美大島にもいます。

さえずりは「キョロロロ・・・」とだんだん小さくなる声です。見たことや鳴き声を聞いたことがある人も多いと思います。

繁殖期は梅雨時で雨が降りそうな時に鳴くので，雨乞い鳥，水乞い鳥とも呼ばれ，日本各地にアカショウビンにまつわる伝説も生まれました。

「水が欲しいと空に向かって鳴いているのは，悪いことをして水を飲めない罰を受け，ノドが渇いて雨を求めているのだ」とか「アカショウビンは，じつはカワセミが火事にあい，水がなくて体が焼けて赤くなったものだ」など。

奄美では，アカショウビンのことを「クッカル」と呼んでいます。じつは田検にも，クッカル（アカショウビン）にまつわる伝説が残されていました。

昭和50年11月に，**「渡　武彦さん」**（6年生 渡慶子さんのひいおじいちゃん）が書かれた**『親がなしぬしま』**という本の中に**「カラスとクッカル」**という民話が紹介されています。

民話「カラスとクッカル」

１　むかしむかし，カラスは赤いきれいな羽をした鳥でした

クッカルは黒い羽の鳥だったそうな。クッカルは，自分の黒い羽を見るたびに，一度でいいからカラスのきれいな羽をつけたいものだと，いつも考えていました。ある日，クッカルはカラスのところへ相談に行きました。

クッカル「カラスさん相談があります。君のきれいな着物と僕の黒い着物を取り替えてくれませんか。」

カラス「そんな黒い着物と僕のきれいな着物を取り替えることなどできるものか。」と，すぐに断られてしまいました。すると，

クッカル「それなら，一度でよいから，そのきれいな着物を僕に貸してくれませんか。」と相談したのですが，またすぐに断られてしまいました。クッカルは，日を改めてまたまた相談に行くことにしました。

クッカル「カラスさん，今日はよい天気だが，暑くもあるし，水浴びにでも行こうではないか。」

カラス「それはよかろう。どこへ行くかい。」

クッカル「ニキューグムリに行くことにしよう。あちらは木も生い茂って，水あそびには最適の場所ですよ。」　（＊グムイ＝水の溜まった淀み，淵）

２　ニキューグムリに着いた二人は，・・・

着物を脱ぎ，思い思いに木の枝にその着物を掛けて，ザブン，ザブンと深みへ飛び込んで泳ぎ始めた。しばらく泳いでいるうちに，クッカルはカラスに気付かれないように水の中からこっそりと上がって，素早く木に掛かっていたカラスの着物を着て帰ってしまった。

クッカルがいないことに気付いたカラスは，

カラス「いっしょに来たのに，自分一人でこっそりと帰ってしまうなんて，へんなやつだなあ。」とひとりごとをつぶやきながら着物を着けようとしたところ・・・たしかに木に掛けておいたはずの自分の着物がなくなっているではないか。すぐとなりの木の枝には，クッカルの黒い着物が掛かったままであった。

カラス「クッカルのやつ，この前から僕の着物をほしがっていたが，いつの間にか，すり替えやがったな。なんということだ・・・。」

３　おこったカラスは，・・・

しぶしぶクッカルの黒い着物を着て帰ったそうな。

それからというもの，カラスが黒い羽を，クッカルがきれいな色つき羽をつけるようになった。今でもカラスはクッカルを見つけると，そのきれいな着物を取り返そうと，「カーカー」と追いかけ回している。一方クッカルは，カラスに見つからないように，人目につかない山奥で，木の穴や土手に穴を掘って暮らすようになったそうな。（文責：福田裕生）